

華咲く江戸時代 本と文学の宴～第一章

教科書にでてくる日本の古典—江戸時代視点で見てもよければ？

ようこそ、徳島文理大学高松駅キャンパスへ！本学文学部は、図書館のド真ん中で本に囲まれながら学べる全国でも珍しい学部です。この夏は、特別に、本学が所蔵する本をお目にかけます。全部、江戸時代の出版物で、200年よりずっと前に刷られた貴重本です。大河ドラマ「べらぼう」が描く時代より古いものも並べました。

本の題名でおわかりのとおり、中学高校の国語や社会の授業で習うものばかり。現在本屋さんや図書館で読む本と、風合いからして、ずいぶん違いますね。どうしてこんなに違うのか、みなさんで考えてみてください。

そうすることで、昔むかしから、日本人が名高い古典を大切にして、読んできた歴史が感じられるはずです。その流れをふまえて、今もわたしたちは古典のすばらしさに触れているのです。

展示をたのしむ用語集

写本 江戸時代より前は本が印刷されることが稀で、料紙に筆で写した本がふつうです。出版文化がはなひらいた江戸時代にも写本の文化は残ります。

版本(はんぽん) 版木からおこして印刷し、製本して売った本。

和本 現在の製本技術と異なる古典的方法でもって、日本でつくられた写本・版本をひっくり返す。和装本。狭義では、ふくろとじされた本のこともさす。

ふくろとじ 今回展示された本のほとんどが、ふくろとじのうち、四つ目とじという仕方で製本されています。本の背に近いところに穴(四つあけるから四つ目)をあけ、麻糸を通してとじます。印刷面の折り目の内側がふくろ状になっていて、のぞけば白紙のままです。

本の料紙 現在流通する本の料紙はパルプが原料の紙ですが、版本はおもに「こうぞ」という樹木の繊維からすかれた紙を用いています。丈夫で長持ちしますが、虫害がおこるので「虫干し」をしました。

版本におどる文字 現代人では修練を積まないと読めない「くずし字」です。筆で書く文化が影響しているわけです。

全部彫師が版木に彫っていきました。

(展示解説)

『万葉和歌集校異』…『万葉集』の研究は江戸時代の国学者・契沖以来本格的になりました。彼らが真仮名を読み、古代のことばを解きあかしたおかげで、現在も日本人の心の歌集として読み継がれているのです。額田王の有名な歌が載っていますね。1805年刊・20巻20冊

『新板 伊勢物語』…『伊勢物語』は『源氏物語』と並んでもっとも普及した王朝物語。在原業平肖像と「東下り」の段さし絵をご覧ください。1767年刊2冊

『源氏物語』…371年前に刷られた絵入りの『源氏物語』(1654年刊・全54巻)から「桐壺」巻冒頭を御覧にいます。となりに展示したのは「ますがた本」と呼ばれる真四角に近い型のもので、こちらは料紙に筆で写した「写本」です。

『新板絵入平家物語』…『平家物語』といえば、中世に琵琶法師の語りで享受されたのをご存じでしょうが、彼らの活躍がすたれた江戸時代には、出版され、読み物として享受されるようになります。ご当地屋島の場面です。1677年刊・12巻12冊

参考までに『平家物語図会』から祇王・仏御前のさし絵も展示しています。

『つれづれ草絵抄』…兼好法師による随筆は、現在『歎異抄』と並んで最も読まれる日本の古典ではないでしょうか。いまの世にも十分通じる処世訓がふんだんに含まれます。教科書でおなじみ、冒頭の部分を展示しました。1688年刊・10巻10冊

『日本永代蔵(にっぽんえいたいぐら)』…「浮世草子」というジャンルを確立した、浪速の作者・井原西鶴による町人物。江戸時代初期にビジネスで成功した人、コケた人のエピソードを集めています。日本の文学は、これ以降、金と人間との関係をテーマにすることをいとわなくなります。1688刊・6巻6冊

『おくのほそ道』…芭蕉は1689年に東北行脚に出ましたが、その体験が紀行文『おくのほそ道』に結実するには年月を要しました。出版はさらに後です。最晩年の芭蕉が素龍に清書を依頼し作成させた本を版本化し、売り出したのは1702年。芭蕉は8年前に故人となっていました。展示するのは寛政元(1789)年の再板本。

『雨月物語』…国学者・歌人である上田秋成が大坂時代に完成させたホラー&ファンタジー集。教科書では「浅茅が宿」がとりあげられますが、讃岐を舞台にした「白峰」さしえを御覧下さい。坂出市青海町の御陵が舞台です。崇徳院(すとかいん)は京都では、なまって「ひとかいん」になり、院を祀る「人食い地蔵」のほこらが残っています。元1776年刊5巻5冊を合本

『南総里見八犬伝』…曲亭馬琴が28年かけて完成した日本古典文学史上最長の大作。最後の12年間、作者はすでに目が不自由となっていて、長男の嫁が口述筆記で協力し、完成にいたしました。「鬼滅の刃」にも影響した歴史ファンタジー。1809～1842刊・98巻106冊を44冊に仕立てる

『牛店雑談安愚楽鍋(あぐらなべ)』…明治時代に活躍した作家・仮名垣魯文の代表作で、日本史の教科書さしえで見かけますね。文明開化後の東京にオープンした牛鍋屋(牛すき焼を出す店)に出入りする人々をペーソス豊かに描きます。1871～1872刊・5冊

図書館の閲覧室の本もゆっくりご覧になってください。